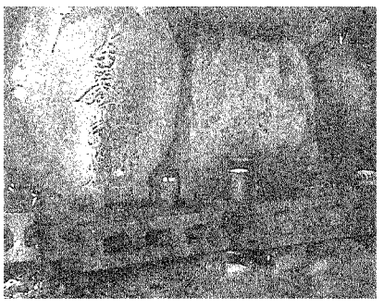
都留の野ぼとけ（二）

庚申塔

鈴木茂治

都留の野ぼとけのなかで、いちばん多いのが、〝庚申塔〟です。現在、市内には七十基の庚申塔が確認されています。この野ぼとけは、その外形から二種類に分けることができます。その一つは

庚申文字碑



中津森玉泉院跡・庚申文字碑

これは「庚申」という字が彫ってあるものです。庚申とは、もともと「かのえさる」と読むのがほんとうで、これは陰暦（現在の太陽暦でなく明治の始めまで使われていた月の動きをもとにした暦）の庚申の年や日をさしています。

つまり、今もよく使われている干支（今年は亥年、来年は子年というように十二種の動物を順番に年月日に当てはめたもの）のことです。今は年にしか干支は使われていませんが、昔は日にも使われていました。だから、今日は申の日、明日は酉の日というように干支が決められていて、十二日ごとにその日が回ってきていました。

さて、庚申というのはただの申の日ではなく、簡単にいうと六十日に一遍来るという特別の申の日だったのです。なぜ特別かというと、これは中国の道教の説だそうですが「この夜眠ると体内にいる三尸の虫が抜け出て天帝に罪科を告げ、早死にさせる」といわれている日なのです。

そこで、村びとたちは庚申の日がくると、庚申塔（庚申塚、庚申堂とも）に御馳走などを持ち寄って夜を寝ないで過ごすのでした。これを「庚申待ち」とか「おさるまち」とか言っていました。

写真の中津森の文字碑は、庚申の年（寛政十二年・一八〇〇年）に建てられたもので、市内には二基（もう一つは境の太宰府天神社）しか残っていません。

この文字碑と別のもう一種は

羽根子入口・青面金剛像

青面金剛像

三尸の虫から庚申の晩に告げ口を聞く天帝というのはこの青面金剛で、庚申待ちの本尊さまです。

この仏さまは、もともと不思議な病気をはやらせるという鬼神。体は青色で、二本から六本の腕があり、弓矢宝剣を握り、頭髪はさか立ち、体に蛇をまとい、足に鬼を踏んでいます。

写真の羽根子入口の金剛像は、碑高一二〇センチで、市内では最大のものです。碑面には四本腕の青面金剛像と上部に日月輪、台下に三猿、唐破風屋根の軒下に鳥などが浮彫され、側面に「于時・正徳四暦（一七一四年）甲午月吉日・奉待庚申供養と刻まれています。

こんな二種類の、庚申塔が、まだ人知れず草木や岩石の陰に眠っているかもしれません。そんな野ぼとけ探しもまた楽しいものです。

都留市有形文化財に「長安寺の茶壺」「甲州騒動の竹槍」が新たに指定されました

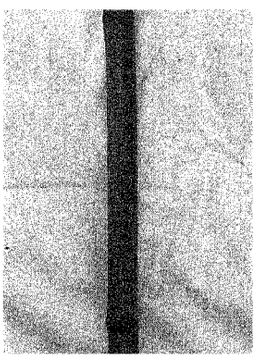
長安寺の茶壺

口径一三・五センチ、底径一四センチ、常滑焼の壺で、この壺は、「甲斐国志」及び寺記に「徳川家康より拝領した茶壺」と記されたもので、本市の近世期を代表する資料です。

甲州騒動の竹槍

約二メートルの竹槍で、九節あるうち第二節から第九節にわたり、一節に四～七行ずつ八節三六行にわたり約九〇〇字が刻まれ、天保七年（一八三六年）八月十七日の甲州騒動の発端から同九年五月の判決に及ぶ内容で、主として甲府代官所での騒動鎮圧に関するものです。

この点から、騒動鎮圧に関わり使用された記念として篆刻保存したものとの指摘がなされ、類例は全国的にも少なく、極めて貴重な資料です。



尾県郷土資料館特別展

ふるさとの郷土玩具展

尾県郷土資料館春の郷土玩具展も今年で3回目になりました。日本全国の郷土玩具は、その地方地方でさまざまな表情があり、また、その土地の風土や人々の暮らしが感じられるあたたかい工芸品です。どうぞ来館して、日本のふるさとにふれてみてください。

日　時　5月20日～27日
　　午前10時～午後4時
場　所　尾県郷土資料館
問合先　市教育委員会社会教育課文化振興係